

# 養鹿場30畝に倍増

## 工事完了 安定出荷体制構築へ

【根室】市内のエゾシカの食肉加工販売業「ユック」(西尾裕司社長)が西和田地区で行っていた同社の養鹿場拡張工事が終わり、捕獲したエゾシカが過剰な敷地が、従来の約15畝から2倍の約30畝に拡大した。現在百頭を想定している養鹿頭数を今冬から250〜300頭に増やし、クリスマスやイベントなどでエゾシカ肉の需要が集中する10〜12月に安定して出荷する体制を構築していく。(犬飼裕一)

## 根室のシカ肉加工販売「ユック」

拡張した養鹿場で「養鹿もエゾシカ被害を減らす取り組みの一つ」と語る西尾社長



道庁エゾシカ対策課によると、養鹿場の面積としては道内最大規模という。同社によると、フェンスの設置や立木保護など今回の敷地拡大に伴う工事は約5千万円で、このうち4千万円は国の交付金を活用した。

既存養鹿場の東側隣地(国有林)約8畝を国から新たに借り受け、南側の隣地(社有地)約7畝は草地改良を行った。

それぞれの敷地は高さ約2・5メートルのフェンスで延長約1・5キロに渡って囲った。新たな造成地では来年1月

下旬から養鹿を行っている。社有地は毎年5〜9月にエゾシカを放ち、より自然に近い状態で養鹿すると共に、コスト対策も図っていく。

同社は2006年からエゾシカの養鹿や加工施設での食肉処理などに取り組んでいる。現在は、ハンターから持ち込まれた個体を含む年間約76頭のエゾシカ肉を、帝国ホテルやリーガロイヤルホテルといった著名ホテルやレストラン、居酒屋などに販売している。

エゾシカ肉は10〜12月に需要が集中する。加えて冬場には、同社の加工施設の処理能力(1日18頭)を超えるエゾシカが囲いなどで捕獲され、廃棄せざるを得ない日もあるなど、有効活用が課題となっていた。西尾社長は「養鹿するエゾシカが囲いわなに入ってくれさえすれば、販路はもう確立できている。エゾシカの安定供給を図り、経営の効率化とエゾシカ肉の有効活用につなげたい」と話している。

情フの往

新幹線で函館に来た観光客を道東に運ぶツアー実現への最大の壁。そ